

美術を通して周りの世界を見直すきっかけをつくる

山田 康彦

教育学部の美術科の美術教育担当の教員になって、二年目を迎えている。私の受け持っている科目は、専攻の学生を対象とした専門の美術教育関係の授業と、小学校教員の免許を取得しようとする教育学部の全学生に開かれたものとの二種類に分かれる。それぞれの性格を考慮して、授業にたいする構えを変えている。

私にとって、美術・芸術教育の研究とは、たんにその教育の内容や方法を検討していくにとどまらず、その教育を通して、今日の教育全体のあり方を質し、同時に芸術を含む文化の現状をも問うような美術・芸術教育を探求していくことだと思っている。したがって前者の専攻の学生を対象にした授業では、美術教育関係といっても、その教育の内容や方法に関してよりも、芸術を中心しながら、今日の社会や文化や教育をどのように考えるか、という問題をめぐって、学生が理論的な武器を身につけ、いろいろ考え

合い、問いを深めていくことを大切にしたいと臨んでいる。後者の教育学部の全学生に開かれた授業は、「図工教材研究」や「小学校専門科目 美術」という科目である。実はこれらが、本格的な美術制作の経験がない私にとって、前者よりも心痛の種なのである。なぜならばそれらは実技が入り、とくに「小専美術」は美術教育ではなく、美術の基礎的な知識や技能を身につけることを目的にしているからである。

しかし自分の力量を越えたことは当然できないので、近年の自分の美術・芸術教育の主張に即したかたちでの美術活動を実践してみる場と位置づけて授業をすすめている。美術・芸術とは、一方では美的な価値あるいは自らの思想や感情や思いというものを表現したものと理解されている。しかし他方で、芸術とは人やものとの対話であり、また自らの感覚や感性を含めて身の回りの生活や文化を見直し批

評することこそ芸術の役割であるという考え方もある。私としては、後者のような視点から、市民社会を担う文化的主体性を培うような芸術教育のあり方を探求していけるのではないかと考えている。そのような角度から、さまざまなワークショップ活動や美術の実践に学びながら、プログラムを組んでいる。

ちなみに、先の「小専美術」の今年度前期のプログラムは、次のような内容になっている。

- ①オリエンテーション・見ないで描く（相手の顔を手元を見ないで描く）、②ブラインド・ウオークからフロッタージュへ（共同制作）、③三重大マップメイキング（写真を使ってカラージュ風に・共同制作）、④スクリブルに物語を見る（なぐりがきから生まれるイメージを詩に）、⑤墨で描く（大きな木に出会い、それを墨絵に・共同制作）、⑥人の身体を視る a 右手と左手を描く、⑦人の身体を視る b 自分の顔を描く、⑧コラグラフをつくる（凹版の貼り付け版画の一種）、⑨自由制作。

このプログラムからもわかるように、六人ぐらいのグループをつくって、共同制作を行う活動を多くとり入れている。それは、これまで十分には気づかなかった感覚を発見することと同時に、美術が自然に人と人との関係を生み出すということを実践してみたいからである。たとえば「ブラインド・ウオークからフロッタージュへ」では、はじめ

に二人組になり、一人が目を閉じ、もう一人がガイドになり、さまざまなものに触れ、空気を感じながら、建物内外を歩き回る。そうした経験を持ち寄って、グループで鉛筆によるこすりだして模造紙に作品をつくる（図A参照）。ある学生は、次のような感想を記している。



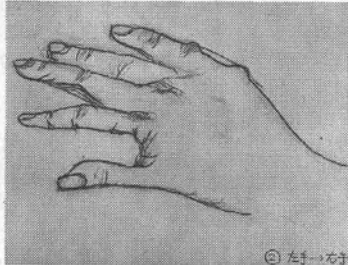
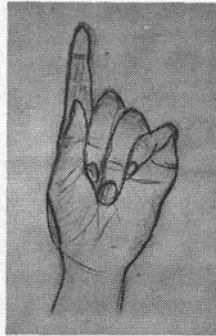
図A

「私たちの班は、あえて人工物だけをフロッタージュしたが、……ブラインド・ウオークは、手にかすかに触れるものが、目で見ると冷たさを感じ、文字の部分に触れると親しみがわいてきた。この感情を作品にした。」

目を閉じてものに触れることによって、目に頼ってとら

えていたのとは違う世界の相貌が発見できる。文字に触れたときに親しみを感じたとは、なんとも現代人的である。「右手と左手を描く」という活動も興味深い。はじめは、ものが空間を切るという素描の一般的なやり方を伝えて、左手を右手で描く(利き手が右の場合・図B参照)。次に同じやり方で右手を左手で描くのである(図C参照)。当然ながら利き手を使った方が描きやすく、逆の手で描くと言ったとたんに学生から「エーッ!」という声があがる。しかし、できあがった作品は、利き手で描いた方は妙に堅苦しく、意外に逆の手で描いた方が表情があり面白いものが多い。参照作品を描いた学生はこのような感想を寄せている。「利き手で描いた絵であるが、そつなく描けてはいるように思われる。……なんとなくこぢんまりとまとまりすぎ

図C (左手→右手) ↓



てしまったようだ。

左手で描き始めたときは、どうなるかと思ってしまうほど、不安定な手元だったが、よく見て描く、ということに徹底できたと思う。また、自分が思う以上に大きく描いてしまうのにも驚いた。こちらの方が、荒けずりだが、味のある仕上がりになったようだ。もう一枚の手に比べると、より生きいきした感じがでていると思う。」

素描の基本的なやり方を知ってもらおうというねらいもあるが、それよりも利き手と逆の手の感触の違いを経験し、利き手に頼る日常生活を振り返ったり、出来上がった作品から表現とは何かということを改めて考えてみてもらえないかと思つて試みている。

先に記したように、美術・芸術教育の自らの主張を実践してみる場としてすすめた活動の一部を紹介した。今までは十分には経験していない感覚に気づいてみるということはある程度行えているのかもしれないが、人やものと深く対話するとか、美術が人間関係を生み出すとか、生活や文化を見直すという点では、まだ模索中である。このような「小専美術」を通して、私自身も自らの議論を吟味し、また学生自身も美術が少し好きになり、そして小学校の教師になっても、また日常生活でも、面白くかつ意義のある美術活動をしていこうとするきっかけをつくれたらと願っている。

(三重大学。教科研「美的能力と教育」部会。常任委員)